

房新社)である。後者では日記・書簡の全部と論文の大部分を分担されている。冬の寒さのなか明治大学第二部の授業のあとも1日も欠かさず仕事を続けられていたと言う。氏はその言葉のよい意味での翻訳家であった。

氏は酒をこよなく愛し、軽い脳硬塞のあとも酒を止めなかった。少しはにかむような笑みを浮かべながら口にする毒舌も、もう聞くことが出来ない。

佐々木秀夫先生を悼む

小 島 基 次

昨年度の学会が早大で行なわれた一週間後の10月21日に、先生は享年64歳で永眠されました。先生は本学会にとっては昭和27年の第一回からの研究発表者として、ほとんど毎年のように研究報告をされてこられたことは広く知られており、また中部支部の理事としても御尽力されてきました。このような先生を突然失ったことは私達にとって痛恨の極みであります。

先生の専門分野は周知のようにロシア語史とロシア古文で、ほぼ独自で築かれてこられた分野だと思われまふ。先生のこの専門分野は東京外国語大学の講師として遺憾なく発揮され、実に25年もの長きに渡って学生たちに御熱心に教授されてきました。私が学生として先生の講義と演習に参加させてもらい得たものは、語史の講義における息継ぐ暇を与えぬ程の板書の速さや、古文演習における一語たりとも疎かにせぬ古文読みの緻密さなどでしたが、これこそ正に先生の真骨頂と言うべきもので、教場で学生たちに接して教えることが生き甲斐だったのだと思えてきます。先生の教場での実践は、『ロシア古文典』シリーズに如実に反映されており、特に《音韻考》は優れて教育的な配慮がされた、歴史的な記念碑に値する程の名著だと見なされています。

講師をやめられた後は、私が世話役となり同好の士を募って、先生はロシア古文研究会 KOJIO を主宰されてきましたが、月一回の例会の折には自前で浜松から上京されて、6年間も私たち会員に厳しさと愛情を持って指導に当たられました。KOJIO の研究活動は《文献註釈》の形でまとめられ、その2冊目の刊行と同時に逝去されたこととなります。

残された私たちの使命は、生前の先生から直に頂いた薫陶の数々を礎にして、先生の目指されたものに一步でも近づく不断の努力しかありません。慈愛に溢れた先生のこれまでの御恩に感謝しつつ、ここに謹んで御冥福をお祈り致します。

◎1990年度(第39回)総会・研究発表会は下記の要領で早稲田大学文学部において開催された。

10月13日(金) 午前 開会式, 研究発表会。